

ギルドホール音楽院のアウトリーチ教育

津 上 智 実

Summary

Outreach Education at the Guildhall School of Music and Drama, London.

TSUGAMI Motomi

The Guildhall School of Music and Drama of the London City is very strong in outreach education. Launched as an elective subject in the year 1984, it was established as a compulsory to all the students of the School of Music in 1994. The section for outreach education was enlarged in 2002 to be an independent department, named Professional Development Department, along with Composition Department, Piano Department etc. In addition it was expanded to have its Master Course for a degree of MMA in Leadership in 2004.

Undergraduate students study 'Creating and Communicating Music 1' in their first year and they should experience performances in at least two different contexts of community, for example at schools, hospitals and community centres. Then they take 'Professional Practice 1' in the third year, 'Professional Practice 2' and 'Independent Performance Project' in the fourth and last year.

Graduate students are 'encouraged to identify a personal pathway of professional development in artistic leadership, composition, performance and/or as a practising artist in a variety of community, trans-cultural or cross-arts settings' (quoted from *Guildhall School of Music & Drama, Prospectus 2006*, p. 52).

In order to make such an education possible to all the students, many kinds of collaborations with different kinds of organisations are prepared. They include 'Connect', 'Note to Note', 'Chamber Tots at Wigmore Hall', 'Healthcare', 'Special Needs', 'Prisons', 'Map/making', 'Open Call', 'Contemporary Ensembles' and others.

The characteristics of its education are as follows: 1) special emphasis on composition and creation of music, 2) on improvisation, 3) on ensemble and collaboration. In general it aims to foster musicians who can work as leaders in collective creation of music in the future society.

It should be discussed whether the Kobe College should make a model of the Guildhall in their totality and integrity of the outreach education, or another type, for example of the Juilliard School of Music, New York, where students are awarded with scholarships, if they accomplish all the requirements in their outreach activities.

1) 本論の目的

この小論は、音楽分野のアウトリーチ教育において最も先端的な教育を実践している英国のギルドホール音楽院について、その教育システムと現場の実態を明らかにすることによって、本学における今後のアウトリーチ教育に資することを目的とする。

2001年度後期より開始した本学音楽学部の授業「音楽によるアウトリーチ」(「同(実習)」は2002年度開始)は、4年目の昨年2005年夏に文部科学省の「特色ある大学教育プログラム(特色GP)」に採択され、4年間にわたって毎年1550万円までの補助金を与えられることとなった¹⁾。それを受けて、2005年11月にアメリカ(ニューヨークとボストン)、2006年3月に英国(ロンドン)の視察を行った。この2回の視察で、アウトリーチ教育および活動で知られる英米の音楽学校7校、オーケストラ3団体、ホール2箇所を訪問し、それぞれ学ぶところが多かったが、中でも教育システムの確立という点で際立っているのが英国のギルドホール音楽院である。

なお、各視察について全体のあらまは『アウトリーチ通信』創刊号および第3号に報告記事を掲載したが²⁾、紙面の都合で細部に立ち入ることはできなかった。そこで、ここに稿を改めてその実態を明らかにしたい。

2) ギルドホール音楽院とアウトリーチ教育

(1) ギルドホール音楽院

ギルドホール音楽院(Guildhall School of Music & Drama、したがって正式にはギルドホール演劇・音楽学校と呼ぶべきであろうが、ここでは通称の略称を用いる)は1880年に創設されたロンドン市立の音楽ならびに演劇の専門教育機関で、1977年の移転以来、市東部のパービカン芸術センターの一角にキャンパスを構えている。学生数はおよそ700名で、その内約130名が演劇を、残りの約570名が音楽を学んでいる。4年制の音楽学部は学生数360名に対して教員250名を擁し、定員100名に受験者数650名、すなわち6.5倍という高い受験倍率を誇る。海外からの入学希望者も多く、全学学生の約4割が海外からの留学生で、その出身国は40カ国以上に上っている³⁾。

2005年はギルドホール音楽院の創立125周年に当たり、2006年度版の立派な学校案内の冊子『ギルドホール音楽院、創立125周年(1880~2005年)、学校案内 2006年 *Guildhall School of Music & Drama, 1880-2005 Celebrating 125 Years, Prospectus 2006*』でも巻頭(第4ページ)にその旨が大きく謳われているが、同じ見開きの右ページ(第5ページ)の本文冒頭に、学校全体のアピールとして次のように記されているのが目につく。

「ギルドホール音楽院は、音楽学校であると同時に演劇学校でもあるヨーロッパで唯一

の主要な芸術学校 (conservatoire) であるという点において、また舞台マネジメント (stage management) と劇場技術 (technical theatre)、プロフェッショナル・ディベロプメント (professional development、専門家としての能力開発)、地域社会へのアウトリーチ (community outreach)、そして音楽療法 (music therapy) の各分野で傑出しているという点において特筆すべき存在である⁴⁾」

このように、「地域社会へのアウトリーチ」と、それを実現するための専門教育「プロフェッショナル・ディベロプメント」(後述)とが、いわば学校の表看板の一つとして特記されている。では、その中味が実際どのようなものであるのかを、学部、大学院の順に見てみよう。

(2) ギルドホール音楽院のアウトリーチ教育：学部

ギルドホール音楽院の学部は4年制で、弦楽器、木管・金管・打楽器、鍵盤楽器、声楽、オペラ、作曲、ジャズ、音楽療法、そしてプロフェッショナル・ディベロプメントの9部門を擁する。

この中で注目すべきはプロフェッショナル・ディベロプメント部門 (Professional Development Department) で、ここでは音楽家として社会に出て専門的な仕事をしていくために必要な技量を身につけるための教育を行っている。そのあらまは次のように謳われている。

プロフェッショナル・ディベロプメント部門は、学生たちにワークショップ実施のスキルや、楽器や歌を教えたり習ったりするスキルに関する知識を与え、また個人として、あるいはアンサンブルのメンバーとして、学外の多様な文脈において演奏・作曲・リーダーシップの機会を与えるためのコースを行っている。

学生たちは、多様なプロジェクトにおいて、作曲家・演奏家・教師・リーダーとしての複合的な役割を担い、今日の社会において音楽家に期待される力量を大いに深く開拓することによって、専門的な実践家として自己を提示する。

本部門は、主専攻部門と連動して、豊かな知識を持った、開放的で、柔軟で、自己啓発的な音楽家、レパートリー [自分の持ち曲] と即興と集団的な創作過程とを含み持つ多様な文脈において、効果的なコミュニケーションを行うことのできる音楽家を生み出すことを促進する。

学生たちは学校や地域諸団体、病院、刑務所において、またウイグモア・ホールやロンドン・シンフォニー・オーケストラの聖ルカ・センターといった演奏会場において、演奏の機会を与えられることになる。さらに王立美術学校、ロンドン現代舞踊学校、ECCO インターナショナルとの連携プロジェクトに参加する機会も開かれている⁵⁾。

このようにプロフェッショナル・ディベロプメント部門においては、学生に学外での多様な演奏の場を経験させることによって、音楽の専門家としての技量を深め充実させる教育を行っ

ている。その主旨は本学音楽学部のアウトリーチ教育と同じと言ってよいが、4年間の学部教育への組み込み方は大きく異なっている。本学においては学部3回生の後期に「音楽によるアウトリーチ（講義）」を、4回生に通年の「音楽によるアウトリーチ（実習）」を選択科目として開講している。一方、ギルドホール音楽院においては学部の1、3、4年次の必修科目としてプロフェッショナル・ディベロプメント部門の授業が次のような形で課されている。

1年次：Creating and Communicating Music 1：音楽学部1年生必修、単位数10^{5a)}

2年次：(Creating and Communicating Music 2)：同2年生選択科目、単位数10

3年次：Professional Practice 1：同3年生必修、単位数10

4年次：Professional Practice 2：同4年生必修、単位数10

同：Independent Performance Project：同4年生必修、単位数10

これらの授業の課題と評価方法のあらましは、以下の通りである⁶⁾。

Creating and Communicating Music 1（音楽学部1年生必修、通年、週一コマ、90分）：

課題*さまざまなアンサンブルでの活動を通じて、リズム、フレーズ、旋律と楽曲構成に対する感覚を磨き、シンプルかつ効果的な構造の音楽を即興的に作る

*****少なくとも二つの異なる文脈（たとえば、小中学校、病院やコミュニティー・センター）で演奏することを通じて、効果的な演奏および音楽によるコミュニケーションの技量を明確に認識して身につけること

評価：授業での学びに関する自己分析レポート（1100～1200語、1月末締切）と二つの場での演奏経験に関する自己評価レポート（各500語以内、5月末締切）

Creating and Communicating Music 2（2年生選択科目、半期、リピータ履修可）

課題*さらに幅広い文脈において、演奏者として、またファシリテーターとしての技量を磨くこと。オプションとして、小中学校プロジェクト、ロンドン現代舞踊学校との連携プロジェクト、音楽劇プロジェクトへの参加の道が開かれている。

評価：授業での学びに関する自己評価レポート（900～1000語、前期履修の場合は1月末、後期履修の場合は5月末締切）

Professional Practice 1（同3年生必修）

課題*ギルドホール音楽院のさまざまな学外プロジェクト（後述）から一つを選び、参加に必要な準備を行う。また主専攻分野での個人レッスンの仕方について予備的な勉強を行なう。

評価：面接（20～30分）による審査。その際、4年次の「Professional Practice 2」の実施計画書を文書として提出すること。

Professional Practice 2 (同4年生必修、前期)

課題* セミナー、ワークショップ、見学などを通して、主専攻分野における、さまざまな年齢と能力の人々に対する個人レッスンならびにグループ・レッスンの仕方を学ぶ。構成要素1：導入のセッション、構成要素2：レッスンに関する主専攻分野ごとの実践的セミナー、構成要素3：実際のレッスンの場での実習、構成要素4：職業実践セミナー、以上4つに参加する。

評価： 日誌 (Teaching Skills Diary) (上記の構成要素1～4に関する記録と考察、教えることと教えられることに関する考察と自己評価、教材の一覧表、以上を含むこと。5月上旬提出締切)、および擬似的な職業インタビューないしは最終プレゼンテーション (主専攻分野毎に異なる、5月末実施)。

Independent Performance Project (同4年生必修、後期)

課題* 自分が選んだ学外での演奏の場において、少なくとも30分の催し (演奏あるいはワークショップ) を企画、プロモート、実施すること。

評価* 最終報告書を提出すること。そこには、1) 企画した催しの概略、実施する場に対する有効性、適切に焦点を絞った演奏歴ならびに演奏者の履歴 (およそ600語)、2) 自分自身と催しとをアピールする公開媒体 (ポスター、ウェブ・サイトなど)、3) 催しの配布プログラムと付随物 (聴衆の反応、批評、CDやビデオなどの録音物)、4) 催しを実施した体験に関する自己評価 (およそ600語) を含むこと。

以上のように、学部で1年次でまず現場を体験させることによって、問題意識を明確に持たせ、その後の学びへの動機付けをしっかりとした上で、3年次、4年次において、専門分野のレッスンの仕方、さまざまな場での演奏およびワークショップの実施の仕方について、授業と実地訓練とを組み合わせ、より専門的に学ばせるという組み立てになっている。

なお、学部教育においては、プロフェッショナル・ディベロプメント部門の専攻生というのは存在しない。あくまで楽器や歌、作曲などの主専攻部門⁷⁾がメインであり、そこで身につけた音楽の力を社会で発揮できるようにするための補完的な教育として、プロフェッショナル・ディベロプメント部門の授業が組み合わされている。音楽の力を社会で生かすためには、まずその前提として、何らかの楽器 (歌を含む) なり作曲なりに秀でていることが必要不可欠であり、したがってこれは必然的な流れとして納得できるものである。

(3) ギルドホール音楽院のアウトリーチ教育：大学院

次に大学院での教育を見てみよう。ギルドホール音楽院では、「演奏 Music Performance」 「作曲 Composition」そして「芸術におけるリーダーシップ Artistic Leadership」の3種の修士号を取得することができる。主専攻としては、器楽、ジャズ、声楽、レペティトゥア・トレーニング、リーダーシップ、作曲の6分野から一つを選ぶ。また、研究重視の論文を仕上げたい

学生には、芸術学修士号および博士号を取得する道も開かれている。

この中で耳慣れないのが「芸術におけるリーダーシップ Artistic Leadership」の修士号（MMA in Leadership）である。この修士課程については次のように説明されている。

この課程は、専門的な芸術の実践家たちを将来の課題に出会わせるようデザインされている。それは演奏実践のさまざまな境界線を乗り越え、実践的な探求の場において、多様な創作プロセスと学習方法とを開拓するユニークな機会を専門的な芸術家たちに与える。

この課程の目的は、スキルを共有するためのフォーラムを催し、また創造的なコラボレーション、臨機応変の演奏とコミュニケーションといった分野において、基礎のしっかりした、個性的で芸術的かつプロフェッショナルなキャリアを展開するに必要な、根本的な技量をさらに伸ばすことを学生たちに可能にすることである。学生たちは、芸術におけるリーダーシップ、作曲、演奏、そして／あるいは多様なコミュニティやトランス・カルチュラルないしクロス・アートといった文脈における実践的な音楽家として、職業的なキャリア開拓の点で自分にふさわしい道を見出し、実現していくことへと促されるだろう⁸⁾。

このように、今後の現代社会において芸術家に求められるであろう複合的な役割を見据えて、従来のジャンルの垣根を乗り越えて活動の翼を大きく広げることのできる、力量ある芸術家の育成を目指していることが分かる。

では、そのカリキュラムは実際にどのようなになっているのだろうか。ここでは「演奏・上演ならびにコミュニケーションに対する創造的なアプローチという点で力を伸ばしたいと考えている演奏家、作曲家、文筆家、教師、そしてアート・コーディネーター」を対象に、フル・タイム（週45時間）で1年、またはパート・タイムで2～3年で修了する課程が用意され、以下の4つの教程（モジュール）が設けられている。

教程1：創造的なコラボレーション、柔軟な演奏、コミュニケーションおよびリーダーシップのスキルに関する基本的技量の基礎付け。即興演奏；声楽、芸術実践への非ヨーロッパ的および民俗的なアプローチの開拓；クロス・アーツ・コラボレーションへの導入；身体とパーカッションの技量；集団での創作；創造的かつレパートリーに関連するプロジェクト；さまざまな文脈における演奏ならびにワークショップの導き方⁹⁾。

教程2：クロス・アーツおよびトランス・カルチュラルなコラボレーション；幅広い分野および背景の芸術家たちや実践家たちと協働する機会を持ち、新たに創作された作品の上演を実現する¹⁰⁾。

教程3：地域社会の場での創作および演奏；これまでの教程での経験に基づいて、履修生は多様な組み合わせのアンサンブルによって、地域社会の文脈において、自分自身の創作素材を生み出し、指揮し、上演する¹¹⁾。

教程4：学生たちは、自分の個別の芸術的なアイデンティティの一つの側面について深く掘り下げ、発展させ、議論する機会を持つ。指導者たちのネットワークに支えられて、この個別に作り上げた、実践を基盤とするプロジェクトは、最終的な公開演奏によって締め括られる¹²⁾。

学生はこの他に大学院の共通科目から2科目を選択科目として履修することができる¹³⁾。また演奏家、作曲家とリーダーへの導入プログラムとして、学生はさらに他の2つの大学院共通科目を履修することもできる。

すなわちここでは、さまざまな文脈において柔軟かつ創造的な音楽活動を展開することのできる人材の育成が、複数の教程の組み合わせによって立体的に行われており、地域社会におけるアウトリーチ活動はその中の一つに組み込まれていると理解することができる。それがクロス・アーツおよびトランス・カルチュラルなコラボレーションによる新作上演などと同列に並べられているところに、現代芸術の先端をいく大都市ロンドンにある芸術学校ならではの強みがあると言ってよいだろう。

なお、このリーダーシップの修士課程に進むには、入学の年の2月ないしは3月に実施される入学試験を受ける必要があり、試験には次の課題が含まれる。1) 楽器演奏ないしは歌唱、さらに／あるいは作曲作品選集の提出、2) 即興演奏、3) グループ活動(実践的なワークショップとグループでの議論)、4) 個別の面接、の4つである。即興演奏や、グループでのワークショップおよび議論が試験問題として課されることから、この大学院の教育において何が重視されているかを読み取ることができる。

(4) コンサートおよび他団体とのリンク

さて、地域の多様な場での音楽活動を学生に体験させるためには、学外のさまざまな団体や機関と手を結び、連携して進めていくことが必要である。ギルドホール音楽院でもこのような連携が盛んに行われており、その主要なものは以下の通りである。

- a) コネクト (Connect)：青少年のための創造的な音楽プロジェクト
- b) ノート・トゥ・ノート (Note to Note)：ロイズ銀行 (Lloyds TSB) 提供のワークショップ
- c) ウィグモア・ホールでの子どもための室内楽 (Chamber Tots at Wigmore Hall)：3～5歳児とその保護者対象
- d) 病院 (Healthcare)：室内楽アンサンブルでの演奏
- e) 養護学校 (Special Needs)：障害児を対象とする演奏とワークショップ
- f) 刑務所 (Prisons)：来年度実施希望で準備中
- g) マップ・メイキング (Map/making)：クロス・アート、マルチ・メディアの新形態を開

拓する

- h) オープン・コール (Open Call) : 全学に呼びかけて、さまざまな専攻の学生たちによるコラボレーションを実施する
- i) 現代アンサンブル (Contemporary Ensembles) : 指導者、学生、地域の子どもたちによるアンサンブル
- j) ロンドン現代舞踊学校プロジェクト (London Contemporary Dance School Project) : 共同でランチ・タイム上演、ジャム・セッション、即興ワークショップを開催する
- k) カルチュラル・セミナー (Cultural Seminars) : ゲスト・スピーカーによる講演とそれに続くディスカッション

ここでは上記の各連携プロジェクトについてその詳細に立ち入ることはできないが¹⁴⁾、本学のアウトリーチ活動の現状と簡単に比較してみると、「c) ウィグモア・ホールでの子どもための室内楽」は本学の「子どものためのコンサート・シリーズ」に近いものと考えられる。また「d) 病院」と「e) 養護学校」のプロジェクトは本学でも中心的に取り組んでいる部分であり、「カルチュラル・セミナー」に相当するものもすでに今年度2回実施の予定である。

一方、「f) 刑務所」での活動は本学では視野に入っておらず、「g) 現代美術やテクノロジーとのクロス・アートやマルチ・メディア」、また「j) 現代舞踊とのコラボレーション」もまだ萌しがない状態である¹⁵⁾。これにはロンドンと西宮という大学の立地条件の違いにも一因があるものと思われる。

上記各種の連携プロジェクトの内、a) コネクトについては、今回の視察で実際に活動の様子を見聞することができたので、その様子を次に報告する。

3) 現場の見学から

(1) コネクトのリハーサル

「コネクト (Connect)」は青少年のための音楽創作プロジェクトで、ギルドホール音楽院がロンドンのルイス・ハム地区、ニュー・ハム地区とタワー・ハムレット地区で過去20年以上にわたって展開してきたプログラムである。このプログラムは若い人々（成人と子どもを含む）にさまざまな組み合わせで音楽を作る機会を与えるもので、楽器を使った、あるいは楽器を使わない創造的な音楽ワークショップを実施し、それが転じて多数のコネクト・アンサンブルを生み出してきたという歴史を持っている。

「コネクト」という名前が示すように、そのねらいはさまざまな関係を作り出すことにある。人々の間に、さらにいろいろな組織や文化の間に関係を作り出すことによって、一人ではそれほどうまく行かないような事柄を、一緒によりよく達成することを可能にしようとするものである¹⁶⁾。

今回の視察中に見学することができたコネクトの練習風景は、2日後のバービカン・ホールでのコンサート（後述）のためのリハーサルであった。ギルドホール音楽院のホールで、2006

年3月12日（日曜日）の11時から14時近くまで行われたリハーサルでは、舞台上にヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、オーボエ、トランペット、トロンボーン、サキソフォン、バスーン、ドラムス、声楽、ピアノ、電子楽器の奏者たちが並び、楽譜なしで、集团的に即興演奏していくという形で進められた。リーダーシップ専攻の大学院生ギー・ウッド Guy Wood が指揮を執り、全体の構成や進行をまとめる役割を果たした。

奏者は学生とさまざまな年齢の子どもたちの混合チームで、同じ楽器の学生と子どもが隣り合って、あるいは学生が両側に子どもたちを従える形で並び、演奏中にもアイ・コンタクトやちょっとした言葉掛けによって学生が子どもたちに助言を与えている様子が見て取れた。

アンサンブルの合間に、主要楽器のソロの聞かせどころを織り込んでいく形はジャズに倣ったものと思われる。中心となるモチーフと大きな全体構造の提案は指揮者からなされていたが、それを実際にどのような形で音楽化するかは個々の演奏者ないし演奏者グループに任される。したがって同じ曲を繰り返しても、繰り返す度にどんどん姿が変わっていく。また演奏者からも自由に意見や提案が出され、その場の話し合いと決断によって曲の姿がどんどん変化していく。確かにここでは集団即興が実現されているのである。

（2）バービカン・ホールでのコンサート

2006年3月14日（火曜日）正午から、バービカン・センター大ホールで「Ready, Steady, Blow 2006 WORLD IN MOTION」と題するコンサートが行われた。これはギルドホール・ブラス・アンサンブルと「コネクト」との合同コンサートで、両者は代わる代わる演奏する。ブラス・アンサンブルの方はバーンスタインの〈ウエストサイド・ストーリー〉から数曲のナンバーを柱として他の曲を取り合わせ、コネクトの方はアンサンブルの形態を次々と変えながら、自分たちの創作した曲を演奏していく。一番大きな編成で演奏した曲（2日前のリハーサルで繰り返し練習していた曲）は〈イーストサイド・ストーリー〉と名付けられていた（バービカン・センターおよびギルドホール音楽院はロンドン市の東部に位置する）。

客席は引率の先生方に連れられた制服の子どもたちがぎっしりと席を埋め、2000席を超えるバービカン・ホールがほぼ満席の状態であった。地域の小中学校に声をかけて招待したものと思われる。正面の前の方には、養護学校の子どもたちと思われる小人数のグループが席を占めており、時々声を挙げたりすると、回りの子どもが遠慮のない目でじろじろ見るといった光景も見られた。

最後にコンサートのフィナーレとして、聴衆を巻き込んだ音楽作り〈ワールド・イン・モーション〉が出演者全員の演奏によって実施された。ここではバーンスタイン作曲の有名なナンバー〈アメリカ〉（先にブラス・アンサンブルによって演奏されていた）の複合拍子のリズム（123 123 12 12 12）について簡単な話をした上で、手拍子と歌で聴衆に演奏に参加してもらうという形が採られた。このようにブラス・アンサンブルとコネクトとが同じ素材に基づいた別の曲を演奏することによって、聴衆をもまきこんで一つのコンサートとしての大きなまとまりを生み出していたのが印象的だった。

4) 特徴とこれまでの歩み

実際にリハーサルとコンサートの現場を見て初めて、プロフェッショナル・ディベロプメント部門の教育がどのようなものであるかが理解できた。最初の訪問時に渡された『プロフェッショナル・ディベロプメント部門ハンドブック』を読んだだけでは、どうもピンとこなかったのであるが、実際に現場を見ることによって、ギルドホール音楽院のアウトリーチ教育は、1) 創作に大きな比重がある、2) 即興演奏を重視する、3) アンサンブルやコラボレーションを基本とする、という点に特徴があり、総体として、集団的な創作活動においてリーダーシップを発揮する人材の育成をめざしたものであるということが分かった。大学院の学位が「芸術におけるリーダーシップ」修士号とされていることも、これで納得できた。

学部から大学院に至るまでの各ステップで、地域社会へのアウトリーチ活動は必須のものとしてされているが、それは上記のようなリーダーシップ教育の一環として有機的に組み込まれている。地域社会とのコラボレーション、異年齢間のコラボレーションは、他の芸術分野とのコラボレーション、あるいはテクノロジー分野とのコラボレーションと連動する形で、リーダーシップ教育の一翼を成している。このようにより高次の教育システムの中に組み込むことで、アウトリーチ活動はしっかりとした位置づけを与えられ、ダイナミックな展開が可能となっている点は注目に値する。

しかし、ギルドホール音楽院の充実したアウトリーチ教育も、一朝一夕にできた訳ではなく、長い道のりを経て実現されてきたものである。プロフェッショナル・ディベロプメント部門を率いるディレクターのシヨン・グレゴリー Sean Gregory から聞いた話によれば¹⁷⁾、1984年に選択コースとして始めたものが、1994年には全学部学生の必修科目とされ、2002年にピアノや作曲に並ぶ部門 (Department) として独立し、2004年に修士課程を立ち上げたとのことである。この間およそ20年……新しい教育の試みが理解を得て、定着していくまでにはそれなりの時間がかかるものなのであろう。

5) 今後に向けて

この半年の間に、英米の音楽学校7校のアウトリーチ教育を視察する機会を得たが、教育カリキュラムとアウトリーチ教育ないし活動との関わりについて、概ね次のように分類できるように思われる。

アウトリーチ教育ないしは活動が

{	カリキュラムに組み込まれていない……	課外活動、就職課寄りの学生サービス
	カリキュラムに組み込まれている……	{ 単位を与える 奨学金を与える

ギルドホール音楽院の場合は、カリキュラムに組み込まれて、単位を与えるものであるが、

それは今やオプションとしてあるものではなく、音楽院全体の教育の中核部分を担い、あらゆる専攻のすべての学生たちを対象として、音楽家として社会で活躍していくために必要な備えをさせるものとなっている。さらに大学院には専攻コースが設けられて、他の音楽院に例を見ないほど徹底したものとなっている。

一方、アメリカのジュリアード音楽院の場合には、アウトリーチの基礎教育は学内の授業として単位化されているが（本学の現状と似たシステムである）、学外実習については、選抜された少数の学生を対象に、ノルマをすべてこなした暁にまとまった奨学金が出るというシステムになっている。その他の学生については、あくまで経験のための課外活動という位置づけになっている。

本学の場合、ジュリアード音楽院のように、奨学金と結びついた形に持っていくのが望ましいのか、あるいはギルドホール音楽院のように、教育の中核に組み込んでいくのが望ましいのか、今後進むべき道は大きく二つに分かれているように思われる。奨学金の場合には、恩恵を受けるのは特定の限られた学生であり、その少数の席をめざして学生たちを競い合わせるという側面を持つことになるだろう。教育の中核に組み込んでいく場合には、学生の側には機会と可能性が全員に平等に与えられるというメリットがある一方、大学として、あるいは学部として、どのような理念で、どのような人材を社会に送り出していくのかという点について、根本的な議論とコンセンサスを得ることが不可欠である。そのためには、従来のコンセルヴァトワール型の教育から脱却して、新たな市民社会に対応する未来志向的な教育システムへの抜本的な改変を行うための、大きな負荷がかかることになる。あるいは新たな第三の道を見出す必要があるのだろうか。この問題については今後、機会ある毎に議論を深め、じっくりとあるべき姿を模索していくことが求められる。

注

- 1) 津上智実「音楽によるアウトリーチ 社会に開かれた学び」財団法人大学基準協会「特色ある大学教育支援プログラム」実施委員会編『文部科学省特色ある大学教育支援プログラム事例集』平成18年2月発行、367～374頁。
- 2) 『アウトリーチ通信』創刊号（神戸女学院大学音楽学部アウトリーチ・センター、2005年11月30日）、6～7頁、および『同』第3号（2006年5月20日）、4～5頁。
- 3) *Guildhall School of Music & Drama, 1880-2005 Celebrating 125 Years, Prospectus 2006* [以下、*Prospectus* と略記], pp. 5 & 28.
- 4) 'The Guildhall School is also distinctive in being the only major European conservatoire which is both a music school and a drama school, and one which is also pre-eminent in stage management and technical theatre, professional development, community outreach and music therapy.'
- 5) 'The Professional Development Department runs courses to equip undergraduate students with a knowledge of workshop skills, instrumental/vocal teaching and learning skills together with opportunities for performance, composition and leadership as individuals and as members of an ensemble within a diverse range of external contexts.

Students participate in a range of projects with the combined role of composer, performer, teacher and leader and present themselves as professional practitioners whilst exploring in greater depth what is expected of musicians in today's society.

This Department collaborates with the Principal Study Departments in helping to produce an informed, open, flexible, self-motivated musician who is able to communicate effectively in a variety of contexts involving repertoire, improvisation and collaborative creative processes.

Students will be put on placements in schools, community groups, hospitals, prisons and performance venues such as the Wigmore Hall and LSO St Luke's. There will also be opportunities for partnership projects with the Royal College of Art, London Contemporary Dance School and ECCO International. (*Prospectus*, p. 30.)'

- 5a) 各学年の単位数は120単位。1～2年生の場合は、主専攻80単位、チュートリアル（個別指導）グループ10単位、当該の Creative and Communicating Music 10単位、総合的音楽研究20単位。
- 6) *Guildhall School of Music & Drama, Professional Development Department Handbook 2005/2006*, pp. 5-22.
- 7) 学部の主専攻とすることができるのは、2005～2006年度の場合、弦楽器（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス）、木管楽器（フルート、オーボエ、クラリネット、バスクーン、アルト・サクソフォーン）、金管楽器（ホルン、トランペット、トロンボーン、チューバ）、ユーフォニウム（バリトーンとテノール・ホルンを除く）、打楽器（ティンパニとパーカッション）、リコーダー、ギター、ハープ、リュート、ヴィオール、声楽、ピアノ、フォルテピアノ、ハープシコード、作曲、そして電子音楽である。
- 8) This programme is designed to help professional arts practitioners meet the challenges of the future. It provides a unique opportunity for professional artists to extend the boundaries of performance practice and to explore different creative processes and ways of learning in a practical research environment.
The aim of the programme is to provide a forum for skill-sharing and to enable students to develop further the fundamental skills for sustained personal, artistic and professional development in the areas of creative collaboration, flexible performance and communication. The student will be encouraged to identify a personal pathway of professional development in artistic leadership, composition, performance and/or as a practising artist in a variety of community, trans-cultural or cross-arts settings. (*Prospectus*, p. 52.)
- 9) Module 1: Foundation for fundamental skills in creative collaboration, flexible performance and communication/leadership skills. Improvisation; voice, exploration of non-European and folk-based approaches to arts practice; introduction to cross-arts collaboration; body and percussion skills; group composition; creative and repertoire-linked projects; performance and workshop-leading for different contexts.
- 10) Module 2: Cross-Arts and Trans-cultural Collaborations. An opportunity to work with artists and practitioners from a range of disciplines and backgrounds, culminating in performances of newly created work.
- 11) Module 3: Creation and Performance in Community Settings. Building on experience from previous modules, students will devise, direct and perform their own material in a variety of ensemble combinations and community contexts.
- 12) Module 4: Independent Practice Enquiry. An opportunity for students to explore, develop and discuss in detail one aspect of their individual artistic identity. Supported by a mentoring framework, this individually structured, practice-based project culminates in a final public presentation. (以上、*Prospectus*, p. 52.)
- 13) 共通科目には次のものがある。副専攻、バロック研究、室内楽、古典研究、発声法、クロス・アーツおよび／あるいはトランス・カルチュラル・プロジェクト、エレクトロ・アコースティック音楽、映画・テレビ・ラジオ音楽、即興による解釈、ジャズ即興、ジャズ作曲および編曲、中世ルネッサンス研究、演奏・作曲あるいはリーダーシップの学問的研究、17世紀研究、音楽教育法（以上、20単位）、楽曲分析、室内楽プロジェクト、指揮、クロス・アーツおよび／あるいはトランス・カルチュラル・プロジェクト（以上10単位）。
- 14) 各プロジェクトの詳細については *Guildhall School of Music & Drama, Professional Development*

Department Handbook 2005/2006, pp. 16-17. を参照されたい。

- 15) 舞踊については、本年度から音楽学部には舞踊専攻が新設されたので、将来的に可能性を探る必要が出てくるかも知れない。
- 16) 'Ready, Steady, Blow 2006 WORLD IN MOTION' のコンサート・プログラムの記述による。
- 17) 2006年3月10日（金）の夕方約1時間、および同12日（日）のリハーサル終了後しばらくの間、プロフェッショナル・ディベロプメント部門の部屋で、さらに14日（火）のコンサート終了後の短時間、ホールの楽屋で話を聞く機会を持った。

（原稿受理 2006年4月21日）